

令和7年度第3回仙台市若林区区民協働まちづくり事業評価委員会 議事要旨

○日時 令和8年3月23日(月)14:00～16:50

○会場 若林区役所 第2・第3会議室

○出席委員

針生 英一 委員 田澤 紘子 委員 梅原 隆司 委員
菊池 馨 委員

○議事概要

1. 開会

2. 委員紹介及び委員会の進め方について

3. 議事録署名委員の選出 針生委員 及び 菊池委員

4. 実績報告

1事業5分程度で発表し、1事業ごとに評価委員による質疑をし、最後に評価委員長から総評を得る。

(1) 若林区健康づくり区民会議

(2) 若林区地域健康づくりちょいチャレンジ事業

担当：若林区家庭健康課

意見 イベント型ではなく、日常動線にどうこの健康を組み込むかが非常に大事ではないか。イベントだと一過性になりがちで、その時だけ参加して、その時だけ何か運動して分かった気になる。例えば若林区内から10ヶ所ぐらい選んでその中から投票で実際に歩いてみるなど、自分たちでどんどん歩くような仕掛けもあるのではないか。また、健康と消費行動をつなげるやり方として、例えば商店街と連携し、美味しいものを食べる前後に30分歩くほか、テーマを毎年決めていくなど、ぜひ9年度以降何か仕掛けを考えていただければと思う。

質問 今回支援者向けのアンケートについて資料はあるのか。

回答 支援者向けにこどもの生活習慣と健康づくりについて課題と感じていること、自分たちの施設でこどもの健康づくりのために力を入れている取り組みを伺ったうえで、今回の事業を通しての職員の意識の変化の有無、また事業をきっかけに何か新たに取組んだことなどを質問項目として考えている。

質問 マンパワーの問題などもあり現実的に継続が難しいとあるが、具体的にご説明いただきたい。

回答 親子トレジャーウォークについては、今は市民センターと一緒に取り組んでおり、可能であれば市民センター事業の中の一つとして継続して実施出来ないか、或いは地域団体の活動の中に組み込めないかと模索してきた。しかし、人員の問題等で難しいことが分かり、予算や人員の負担があまりかからない方法が採れないか等、検討しているが、

現実的に難しいところがある。ただ市民センターや地域団体には来年度も協力いただく予定となっており、少しでも健康づくりの要素が残っていくよう働きかけていきたい。

意見 この事業は市民センター単位で出来そうな事業だと思われる。良い意味で家庭健康課を離れて、しっかり地域で育てて欲しい事業だと思うので、来年度、実践者目線を伴ったマニュアルを作ることが出来れば、他のエリアにも波及していけるのではないかと。この「ちょいチャレンジ事業」は、全体的に子どもに対する啓発として、教育的な視点でもしっかり届いていることが伝わってきた。そういった意味では現実的な問題を抱えていることは分かるが、もう少しチャレンジしていただければと思う。まさに地域課題である。肥満解消にも繋がっていくのではないかとと思うので、ぜひ検討していただきたい。

質問 第3期行動計画での取り組みとして「ちょいチャレンジ事業」がその特徴的な事業の一つと捉えて良いか。

回答 はい。

質問 若林区健康づくり行動計画の期間は12年間、その間どのようなステップを踏んでいくイメージか。また、「ちょいチャレンジ事業」の講師謝礼146,000円について、その使われ方をご説明いただきたい。

回答 「ちょいチャレンジ事業」は令和8年度で終了予定だが、令和9年度以降については、別の地域での実施を検討している。来年度はその準備として「ちょいチャレンジ事業」と並行して少し別地域を分析し、地域を替えて健康づくり事業を継続していければと考えている。行動計画についても、令和12年度に中間評価を行う予定だが、先の長い計画であり、途中小刻みに見直しが必要と思っている。来年度は、生活習慣病の中でも高血圧をテーマにした事業を展開出来ないかと考えている。また、「ちょいチャレンジ事業」の146,000円の講師謝礼についてであるが、全額は使用しておらず今年度は親子トレジャーウォークの講師謝礼のみに使用している。

(3) 若林区安全安心街づくり活動推進事業

担当：若林区区民生活課

意見 パネルやキャンペーンの実施、グッズの配布も大事だが、それだけでは安全安心の担保は難しく、犯罪者が犯罪を思いとどまるような物理的な環境整備が最大の抑止力とも言われる。危険箇所マップの作成、暗い箇所を無くしていくこと、コンビニなど街中で人がいる場所を拠点化しネットワーク化することなど、地域で活動する方々の考えを尊重しつつ、ぜひもう一步踏み込んでいただきたい。具体的な活動につながっていくよう区役所も関わっていただきながら、新しい視点で新しい活動しようとする中で、それに共鳴して防犯協会に入ってくれる方も増えてくるとも思うので、そうした取り組みを期待したい。

質問 南材地区での事業の実施が多いが、この地区の方々がより積極に関わろうとしているからか。

回答 この地区では、令和4・5年度に若林区安全安心街づくり活動推進モデル地区事業の指定地区だったり、防犯協会に学校も入っていたり、地域が町内会活動もしっかりして

いるなど、地域に熱意があり結果的に多くなっている。会長の認識としても、自分たちだけではなく大学生の力も借りて、来年度には一緒にやっていけないかということも考えている。我々としても、この地区のみならず可能な限りいろんなところに声をかけていきたい。

質 問 国際電話の休止申込特設ブースの来場者数について、また来年度から厳しくなる自転車の違反に関する啓発活動についてご説明いただきたい。

回 答 国際電話の詐欺被害が多いため、国際電話を使わない人は最初から着信拒否するなどのキャンペーンを市政だよりに掲載するなど県警とも連携して詐欺防止に取り組み、結構高齢者などが着信拒否の手続きを行った。自転車の青切符については、例えば区民まつりで自転車の盗難防止活動の一環としてヘルメットの着用も呼びかけている。また、区民生活課では交通安全推進協議会を所管しており近隣の学校の生徒宛に啓発のチラシを配布したほか、若林警察署と自転車交通安全モデル地区事業も展開し、青切符の導入や着用率がなかなか伸びないヘルメットの着用について啓発を行っている。

質 問 活動に若い世代を取り込むための工夫として、どのように取り組んでいくのか。また、ティッシュなど啓発グッズ配布では、相手に受け取っていただけない場合もあるようだが、配布にあたって工夫等していることは何か。

回 答 1点目の課題は防犯協会に限らない。地域にはそれぞれ特有の課題があり、地域をよく知っている皆さんが動くのが一番で、協会の役員の方などが知り合いに声がけしている。行政の役割は各団体をつないでいくことだと思っている。地域も大学と連携したり、いろんな大学や高校等での講座もあると思うので、それらをつないでいくところで頑張っていきたい。また、ティッシュの配布は、暑い日には冷却するシートに変えたり、手渡しの仕方やタイミングも受け取りやすくなるよう工夫している。啓発用品についても、区民生活課から防犯協会に提案したり、逆に防犯協会からご要望をいただきながら選定している。

(4) 若林区民ふるさとまつり

担当：若林区まちづくり推進課

質 問 当日のボランティアに応募した1名の年齢層や参加目的等を教えていただきたい。

回 答 荒浜地区にお住まいの60代女性で、全戸配布したチラシの中のハーバリウムグラスサンドアートで「ミニ荒浜をつくろう」という東北学院大学の学生企画に非常に感銘を受け、ぜひ自分もこの体験コーナーと一緒に盛り上げたいというご意見をいただいた。

意 見 個人に刺さった良い事例だったと思うが、事業の目的である若林区への愛着の醸成と区民意識の高揚について考えると、区民まつりでは、非日常的なイベントを通じて日常のまちづくりを盛り上げていくことも重要で、イベントを運営する側、まちづくりを支える側になりたいという区民意識が醸成されるようになって欲しい。メンバーの高齢化はこの事業についても同様で、チラシの全戸配布に対し1名しか集まらないことに対して、今後も対策を練っていただきたい。例えば、年1回区民まつりを一緒に盛り上げようと呼びかけがあっても良い。参加者2万人はイベントとしてはすごいが、来年度誰

も手伝おうと思わないというのは問題で、まつりに参加して感動した方が次は手伝ってみようとか、まちづくり協議会に参加してみようと思ったときにしっかりした窓口があることが大事だ。イベントには若い世代も来ており、その方々にまつりへの参加の意欲を持ってもらうことも大事で、ジュニアリーダーなど地元の子どものパワーも頼りにするなど、今年度の結果を踏まえぜひ来年度も良いチャレンジをしていただきたい。期待している。

質 問 37年続いている事業だが、この事業に関して見直しの動きや他区の事業を参考にするなど横の情報共有等の動きはあるのか。

回 答 毎年2月に各区の担当職員が集まって情報交換会を行っており、その話題の半分はふるさとまつりの話になっている。その中で、例えば若林区では、他区の事例を参考に協賛金を増やす取り組みを行い、実際に協賛金を増やすことが出来た。

意 見 これだけの規模の予算を使っている事業なので、効果的な事業運営を行っていただき、いろんな人を巻き込んで自分たちが主体的に動いていってまちづくりにつながっていくような動きを加速させていっていただきたい。

質 問 学生企画に参加した3名の学生は若林区民か。

回 答 3名の学生は、企画運営に携わっていただいたが若林区民ではない。

意 見 大学生に継続的につながりを持っていただくために、サークルや研究室とつながりを持つことを一つ視野に入れても良いのではないか。

(5) 地域メディアの活用による〈新しい地縁〉創造プロジェクト

担当：若林区まちづくり推進課

質 問 この事業はラジオ3を使うことが前提となっているのか。最近はいろんなメディアがあり、SNS等を使って若い人たちの地域情報発信というのものもあるのではないか。

回 答 将来的には、SNS等への展開も考えていく必要があるかもしれないが、一方ラジオでの生の取材の声を流すのも良いとの感想を持った学生もいたと聞いている。今後の課題としてとらえていきたい。

意 見 私も通勤時にラジオを聞いているが、ラジオは聞きたいというより流れてくるコンテンツであり、だから頭に残らない。そのため、個人的には今の時代を考えると必ずしもラジオである必要がないのではないか。地域の情報を集めて発信するとなると、ラジオでは一方通行型になるが、SNSの場合は聞き手の反応が分かる双方向性を作りやすい。成果も見えやすいので、来年度以降、少し考えていくと良いと思う。

質 問 今年度は大学生の参加があったが、高校生の参加も検討してはどうか。他の民放FMでは高校生が番組作りをやっているところもある。区内に高校が5校あるので、彼らにそうしたチャンスを提供するのも一つではないか。それから、この番組についてどれだけの職員が知っているのか。まずはそこからではないか。食堂等で昼食時に流すなど、番組が終わった後も耳にする機会を持つための工夫があっても良いのではないか。

回 答 どれ程の職員がこの番組を知っているかまでは把握はしていない。今後、職員が使う電子掲示板への記事掲載や区内課長会での周知などの機会をとらえて庁内に周知していきたい。

質 問 事業の目的・狙いの中で、区民のコミュニティ意識を高め様々な角度から地縁に対する再認識とともにまちづくりへの機運醸成を図るとあるが、その成果と効果について説明いただきたい。

回 答 その地域の良さを発掘してそれを配信することで、地域の方に良さを再認識していただく機会になっているのではないかと考えている。聞き逃してしまった番組は、Spotifyで過去の配信内容をみていただけるよう周知していきながら、地域に対する再認識に対してコミットしていけるよう工夫していきたい。

意 見 この事業の効果測定が出来ていない。ラジオを聞いているかどうかは仮定の話でしかない。そこをしっかりと見据えていく必要がある。

意 見 声の音声を届けることが大事であれば、FM局にこだわる必要はないのではないかと。これまでもこの報告会で同様の質疑応答が繰り返されているので、そのあたりをスタッフのメンバーと話しあっていただいた方が良い。

質 問 事業を行ってみての問題点・課題等で、広報の充実とあるが、具体的にはどのようなことか。

回 答 若林区まちづくり協議会の会報でお知らせしているが、それだけでは十分と言えず、例えば市政だよりで Spotify による過去の放送が視聴できることをお知らせするなど、広報については更なる工夫が必要ではないかと考えている。

意 見 取材先によっては交通費負担も大きくなるという課題について、交通費の負担がかからない場所の取材を考えても良いのではないかと感じた。

(6) 合唱のつどい

担当：若林区まちづくり推進課

質 問 合唱連盟の考え方を変えていくことについて何か課題となっていることはあるか。

回 答 連盟の方々は、長い間この事業を頑張ってきたという思いやこだわりがある。また、それが原動力になっているところもあるので、そういった思い等を尊重しつつ、変わっていくべきところとの兼ね合いが難しいところかと思う。

質 問 若い人たちの考え方を取り入れると必ずぶつかる。そこで盾になってくれそうな人、若い人の話も取り入れてみたいと言ってくれる人はいるのか。

回 答 合唱連盟の役員の中には、若い方の意識も取り入れていきたいとおっしゃる方もおり、そうした意識が連盟の中で少しずつでも浸透していったら欲しいと思っている。

質 問 吹奏楽部の特別出演がコンクールの時期と重なるなど条件が整わず出演がかなわな

かったことについて、開催時期を例年7月にしているが、この時期が適切かどうか見直しを検討する可能性はあるか。

回 答 今年度、学校に出演依頼を行った役員の中で時期をずらすことが出来ないかということが話題になった。その際、もし時期を変えとしても再来年度以降になること、また例年10月に行われる区民まつりの準備期間とも重なってくる可能性があるため難しいのではないかとの意見が出ている。

(7) 広瀬川灯ろう流し「光と水とコンサートの夕べ」

担当：若林区まちづくり推進課

質 問 事業費について、運営資金の捻出が必要で、広報協賛活動を充実したいとのことだが、事業費に対する協賛金や募金は何割だったのか。

回 答 割合については算出していない。(収入の内訳については口頭にて説明)

質 問 募金活動の充実について、募金額は増えているのか。

回 答 前年度に対する増減については確認していない。

意 見 この事業が区民協働まちづくり事業と位置付けられているのであれば、募金を通して参加するというような意思の伝え方でも良い。そのあたりも明確にした上で、募金活動の充実を図っていただきたい。

(8) 若林区魅力発信事業 わくドキまち歩き

担当：若林区まちづくり推進課

質 問 ツアーガイドをもっと増やす仕組みを作ることは出来ないか。市の事業として実施するのであればガイドを発掘するような事業をやっていくべきではないかと思う。また、500円の参加費も見直して良い時期ではないか。いろんなところでまち歩きを行っているが、最低でも二、三千円取っており、高いところでは一万円の場合もある。

回 答 ベテランのガイドのほか、今年度新たにお問い合わせしたガイドもいる。イベント内容が固定化しつつあるのも課題と捉えており、新たなガイドによる新たなルートの開拓も今後必要と思っている。参加費については、物価高騰もあり、また体験の機会を増やしていきたいという考えもスタッフ側にはあるが、500円で参加出来ることが強みでもあるとの意見もある。参加費を少し上げれば、その分体験出来る選択肢も増えることも協議に上がっており、難しいところではあるが検討していきたいと考えている。

意 見 若林区が500円でやっているから、民間も500円でしか出来ないという足かせになっているかもしれないということも考えていただきたい。

質 問 お土産代が参加費より高くなっているのはどのような事情か。

回 答 第1回目「新寺花さんぽ」での体験など、新たな取り組みを増やしたためお土産代が少しかさんでいる。

質 問 参加費が安すぎると思う。だから人気も出る。1回目は178名の申し込みがあり、その内の160名ほどの人が参加する機会を失ったということでもあるので、この点はもう

少し考えて欲しい。また、以前から質問しているが、この事業を手放さないのはなぜか。民間に任せてはどうかと思うが、どのようにお考えか。

回 答 いろんな課題はありながらも、地域の方と区役所が連携して、地域の発展につながるイベントを一緒に行うこと、さらにそれを続けていくことに意味があるのではないかと考えている。

意 見 ベテランガイドの話をして500円で聞けるのはすごい価値だと思う。だからこそ、その価値を高めて欲しい。インバウンドが優勢な中、多くの方に参加の機会を開くためには、やはりこの事業を手放して、その事業予算15万円で、積極的に人材育成に取り組んでも良いのではないかと。事業として上手くいっているからこそ次のフェーズに入った方が良く思われるので事務局としても考えて欲しい。

質 問 まち歩き事業はいつから行っているのか。

回 答 この場でははっきりとは分からないが、地下鉄東西線の頃だったかと思う。

質 問 結構続いているので見直しの時期でもあるのではないかと。3回実施した中で、申込者数が減っていったが、それをどう考えているのか。まち歩き+ α の要素として、例えば家庭健康課の健康づくりなどをそのコースに取り入れるというも一つの方法ではないか。また、1回のまち歩きに対して企画会議が3回持たれているが、会議の内容はどのようなものか、その3回の会議でどのような進展があるのかについて説明いただきたい。

回 答 1点目については、2回目と3回目に申込者が減少したのは、募集の際に市政日より全市版に掲載することが出来なかったことが原因の一つと考えている。2点目のまち歩き+ α の要素として、今回では菓子作り体験がそれにあたるが、その他施設を体験することでまた訪れたいと思ってもらえるきっかけとなっていただけであればと思っており、令和8年度には3回のまち歩きを通じて何か体験できる要素を少し取り組めないかと企画会議の中でも話し合っている。3点目について、3回の会議の中で回るルートの検討や企画内容の深掘り、企業などへの協力要請などを含めた企画会議を行っている。学生企画の会の場合は、企画の実施可能性も含めて検討するため、その分会議の回数も多くなっている。

質 問 今年度の事業は概ね決まっているということか。

回 答 令和8年度の第1回目については、3月の市政日よりで募集案内を行うため、1月には内容が決まっておき、それに向けた1回目の会議は昨年12月頃から動いている。1回目と2回目の会議で詳細を決め、3回目は最終確認となる。

意 見 まち歩き+ α については、家庭健康課の健康づくり区民会議と一緒にするような企画を考えてみても良いのではないかと。

(9) 総評

皆さんお疲れ様でした。

毎年、この委員会で各委員がいろんな意見をお伝えしているが、それが政策に反映されているかと言えば、フィードバックが少ないと感じている。次の年も同じ流れで事業が進み、昨年あ

るいは一昨年と同じことを言ったはずだと思うが、これまでの話を聞くと、前年度のうちから次の年度のスケジュールが決まっており、そのスケジュールでスタートしないと間に合わないという事情が分かった。それでも、この場に出た様々な意見を若林区の方でかみ砕いて、次年度にどう生かしていくかについて、すぐに今日からでも話し合っていないと再来年度に間に合わないということかと思う。ぜひ本日各委員から出た意見を、取り入れるところは取り入れていただき、切り捨てるところは切り捨てていただき、若林区の事業としてよりブラッシュアップして頑張ってください。

5. 閉会